

	<p>項 目 (重点としたものに○)</p>	<p>自己評価 (学校の目標達成状況及び学校の取組の適切さ、改善方策について等)</p>	<p>外部評価者からの意見・指摘</p>
<p>教育環境の充実</p>	<p>①学校安全の推進</p>	<p>○関係機関と連携して、計画通り地震、火災、不審者に対応する避難訓練を実施した。</p> <p>○見通しのききにくい箇所に、対策をとってきたことで、校内での児童の衝突事故は、昨年度よりも減少してきている。</p> <p>●年間8回、下校時に教員が校区内での交通安全指導を行った。児童の登下校時の交通安全意識には改善すべき点が多くある。来年度は定期的に朝会等を利用しての指導も必要であると考えている。</p>	<p>③地域との協働推進について 【地域の立場から】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・夏祭りや秋の健康まつりへの子どもの参加率が市内他地域と比べてとても高い。子どもに参加してほしい行事のチラシ配布に学校が協力してくれるのがありがたい。 ・地域で子どもを育てる、次の地域の担い手を育てる、という意識でやっている。 ・地域の役員の世代交代に苦勞している。今後の地域行事の継続には少々不安がある。
	<p>②教育情報化の推進</p>	<p>○全ての教職員が、授業においても公務においても、教育の情報化に積極的に取り組んでおり、活用能力は高まっている。</p> <p>○校内での会議、研究会、連絡・打ち合わせは、情報機器の利用によってペーパーレス化が進んでいる。</p> <p>○教職員の間で学級・学年・学校閉鎖時のオンライン授業の実施についての共通確認をし、保護者や児童にも周知を図った。</p> <p>●児童のタブレット端末の使い方に係る約束があいまいになっている場面が多く見られた。また、情報モラルの未熟さが原因となる児童間トラブルも起きている。</p> <p>●教育における情報化の推進と、従来からの学習形態とのバランスのとり方に、教員間で違いが生じている。</p>	<p>【保護者の立場から】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2019年度で子ども会がなくなったが、それを良い方向に生かしている。かつては、地域行事は子ども会に入っていないと参加できないもの、という雰囲気があったが、池子地区の子どもなら誰でも参加できる行事という受け止め方に変わってきている。 ・地域の役員の方が高齢化しているので、現役保護者として子ども目線を地域行事に取り入れてもらえるように協力していきたい。 <p>【学識経験者の立場から】</p>
	<p>③地域との協働推進</p>	<p>○学校評議員会・地域教育協議会を学校運営協議会に近い形で運営することに着手した。</p> <p>○年間を通じて、各学年で地域講師を招聘しての授業が実施された。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学校とは違う場面での「大人」の姿を子どもたちに見せることはとても有意義である。 ・「地域との協働推進」というと、地域任せになってしまいが

		<p>○郷土資料室の運営に地域の方が積極的に参加している。</p> <p>○休日の地域や保護者団体（池サポ）が主催する行事には、児童が多く参加した。教職員も過重な負担にならない範囲で協力した。</p>	<p>ちだが、活性化・継続化のためには、行政の関わりが重要である。学校、保護者、地域に、第三者的な人が加わるといいだろう。</p> <p>・教員の働き方改革と地域との協働は相反するものになりがちだが、学校はそこをうまく調整して教員が地域と協働できるようにしてほしい。</p> <p>・アンケートへの向き合い方は、自分が回答したことで変化がある、と実感できると変わってくるものである。アンケートを実施する者、変化が実感できる報告の仕方、等が工夫できるというのではないか。</p>
	<p>④学校評価を生かした学校づくり</p>	<p>○年間を通して行事や授業の公開を実施し、保護者や地域の方が児童の様子を直接見る機会を設けた。</p> <p>○公開を見ての感想メモや学校評価アンケートを通して、保護者や地域の方の学校へ意見を集約した。</p> <p>○学校関係者評価委員会、学校評議員会、教育委員会訪問等、外部の評価をいただける機会を大切にした。</p> <p>●学校評価アンケート等の回収率が低い。本校の教育活動への関心を高める方策が必要であろう。</p>	
<p>一 学習指導の充実</p>	<p>①授業改善の推進</p>	<p>○一人ひとりの教員が、授業改善のために、主体的に研究・研修に取り組み、子どもの学びの状況を見取る→指導の工夫・改善→実践、という授業づくりのサイクルの意識を高めている。</p> <p>○ICTを活用した学習指導を積極的に行った。</p>	<p>③体験活動の充実について</p> <p>【保育園の立場から】</p> <p>・職場体験の話を持ちかけられたとき、最初は正直なところ、「小学生が？」と思ったが、実際に受け入れてみたところ、どの子も幼児への接し方にとっても心がこもっていて、体験したことをとても喜んでくれた。大人になったら保育士になる、と言った子もいて、受け入れた保育園として、素晴らしい活動だなと思った。</p> <p>【保護者の立場から】</p> <p>・学校側から、当初の年間計画にはなかったが、子どもたちの実態の改善の方策として、自立を促すために職場体験の実施を考えたので協力を、という依頼を受けた。先生方の思いを受けて、体験先の確保と当日の付き添いに協力した。一部の保護者にはこの実施に批判的な方もいたが、当日の子どもたちの</p>
	<p>②健康体力づくりの推進</p>	<p>○年度初めと夏休み明けの2回、発育測定を行い、摂食障害、ネグレクトの早期発見に努めている。</p> <p>○児童会の体育委員会主催行事や縦割り活動で、子どもたちが外で身体を動かすきっかけとなるような活動を行った。</p> <p>○学校栄養士が全学年で食育の授業を行い、食生活改善の意識を育んだ。</p> <p>●全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から、スポーツクラブ等に属していない子の学校の授業時間以外での身体を動かす時間が短いことがわかった。自らの健康・体力増進のために、自ら身体を動かそうとする意識を育てる必要がある。</p>	

	<p>③体験活動の充実</p>	<p>○各学年で発達段階に応じた体験活動を授業に取り入れた。 ○6年生は、保護者や地域の協力を得て、年間で2回、それぞれ半日の日程で職場体験を行った。 ○5年生の林間学校は、藤野観光協会と連携して、小規模校の良さをいかしたオリジナリティの高い宿泊学習になっている。</p>	<p>様子を見て、やって良かったと思っている。</p> <p>【学識経験者の立場から】 ・教育課程とは柔軟であるべきで、児童の実態から課題を見出し、新たな活動を計画・実施することは大いに奨励したい。今回の実施をふまえて、次年度以降に向けて学校としてどのように教育課程に位置付けるか、キャリア教育という観点で中学校の教育課程との繋がりを持たせられないか、を探っていくとよいのではないかと。</p>
	<p>④今日的課題への取り組み</p>	<p>○各学年で、学習指導要領の内容に関連付けて、今日的な課題を授業づくりの際の視点として取り入れた。 ○環境教育と福祉教育については、学校全体の指導計画を作成し、年度末に実施状況をまとめている。</p>	
<p>Ⅱ 支援の充実</p>	<p>①支援環境の充実</p>	<p>○校内支援委員会と拡大支援委員会のそれぞれの役割と取り扱う内容を明確化し、計画に基づいて運営した。 ○SC、SSW、教育研究相談センター、療育センター、通級指導教室等の外部機関と連携して、要支援児童についての理解を深めて適切な指導の在り方を探った。 ○教育相談コーディネーターによる支援教室での取り出し指導を、年間を通じて行った。 ○一人ひとりの教員が「すべての児童を念頭に置いた授業づくり」という意識をもつようになっている。</p>	<p>Ⅱ②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進 Ⅲ①学校・学年・学級経営の充実 ③信頼に基づいた指導の推進 【保護者の立場から】 ・学級運営が困難な状況が発生し、体調を崩す先生も出たことは、大半の保護者が、子どもにとって学校が「安心できる居場所」になっていないと感じてしまい、「残念」と思ったところがある。 ただ、これを全て学校の責任にしてしまうのもどうかとも思っている。また、保護者自身の学校に関わる負の体験から「どうせ学校なんか」と、スタート以前から不信感を持ってしまっているのもどうかと思う。 学校が担うこと、保護者が担うこと、それぞれあるはずで、その境界線があいまいになってしまっていて学校を責める一方になってしまうのは避けたいと思う。保護者としての子ども</p>
	<p>②安心できる居場所づくりと絆づくりの推進</p>	<p>○広々とした空間で、子どもたちは伸び伸びと過ごしている。 ○年間を通して、学級・学年の枠を超えたつながりを生まれるよう、児童会活動や授業での交流が実施された。 ●児童間に多様性を尊重し合える関係が構築されるよう、指導のあり方を考えていく必要がある。</p>	
	<p>③いじめ対策の推進</p>	<p>○いじめ対策について教職員間で共通理解を深め、日常の情報交換を密にし、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努めた。</p>	

	<p>③不登校対策・問題行動対策の推進</p>	<p>○試行の段階ではあるが、9月から支援教室「わたあめ」を開設した。登校しぶりをする子が教室に向かう前にワンクッションを置く場として、教室での一斉授業に馴染めない子の一時の気分転換の場として、情緒が安定しない子のクールダウンの場として、活用された。退職教員のボランティアによって、週に3日間開いた。今後は開設日を増やし、更に広く活用していきたい。</p> <p>●長期間、全く登校できていない児童が若干名いる。それぞれの状態に応じて、外部機関の協力も得ながら関わりを持つことはできているが、改善・解決には至っていない。</p>	<p>への向き合い方を考えたい。</p> <p>【学識経験者の立場から】</p> <p>かつてより、小学校の先生は、力のある先生ほど「学級王国」になる傾向がある、と言われてきたが、以前に比べれば、小学校も集団指導体制ということ意識するようになってきている。今後も、くり返し、学級経営の「軸」、学年経営の「軸」、学校の「軸」を確認し、徹底していく必要があるだろう。</p>
	<p>④幼・保・小、小・中の連携推進</p>	<p>○入学前の幼稚園児・保育園児を招いて学校の様子を見てもらう1年生による「ようこそ集会」を再開した。幼稚園・保育園側の要望に応じて、以前とは内容を変更して、園児たちが学校を体験できるようなプログラムにした。</p>	<p>III②研究・研修の充実</p> <p>【学識経験者の立場から】</p> <p>年間を通して、校内研究の講師を務めてきた。今、池小が取り組んでいる研究は、「新しいものを生み出す開発」といえるものだ。先生たちは、お互いに授業を見合って、子どものエピソードを語り合うことに地道に取り組んでおり、年間で7回もの授業研究会が開かれた。これは、なかなかできることではない。決して評論家にならず、あの授業に参加していた子どもにとってどうだったか、を常に大切にしている。これは古くて新しい手法といえる。先生方はとても苦しい思いをしているところもあるだろうが、来年度に向けてゴールの共有ができることより一層活性化するだろう。</p>
<p>III 学校組織の充実</p>	<p>①学校・学年・学級経営の充実</p>	<p>○小学校の学級担任制の意義をふまえて、集団指導体制も有効に取り入れるようにしている。</p> <p>○学級数が少ないので、教員は学年を越えて、低・中・高学年のブロック内で協力し合っている。</p>	
	<p>②研究・研修の充実</p>	<p>○様々な教育課題に対応できるよう、年間を通して多岐にわたる内容の研修の機会を設けた。</p> <p>○市の委託研究校となり、2年計画で校内研究に取り組んでいる。</p> <p>○年間10回の研究全体会を開いた。うち、7回は授業研究会である。ただ授業を見て終わらせるのではなく、研究協議を通して、同僚がそれぞれどのようにその授業を見たのか、何を感じ取ったのか、を知ることによって、一人ひとりの教員の授業を見る力が高まり、さらに授業力が高まることを目指した。</p>	

	<p>③信頼に基づいた指導の推進</p>	<p>○教員は皆、児童一人ひとりを共感的に理解し、人権尊重を心がけて指導を行っている。 ●感情的な行き違いで「不適切な指導」の指摘を受けることがあるので、児童とも保護者とも信頼関係を築くことを第一としたい。</p>	
	<p>④働き方改革の推進</p>	<p>○学校でできる改善は十分に行っている。 ○保護者や地域の理解も進んでおり、勤務時間外や休日での教職員の対応について、進んで配慮を示してくださることが多い。 ●行政による、より一層の支援を期待する。</p>	